



TITLE:

4-7 チンパンジーにおける予期による反応促進の発達(X.共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

松澤, 正子

CITATION:

松澤, 正子. 4-7 チンパンジーにおける予期による反応促進の発達(X.共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 2005, 35: 98-98

ISSUE DATE:

2005-08-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/166153>

RIGHT:

口唇部をつねに接触させるという特徴をもっていた。またこの時期より、表情以外にも「床を手のひらで叩く」という単純な身体の動きも模倣するようになった。こうした全身体的な行為についても、チンパンジーはモデルとの身体接触をともなった反応を示した。チンパンジーの大人が示す全身体的な模倣能力は、ヒトのそれに比べて、かなり制約されていることがわかっている (Myowa-Yamakoshi & Matsuzawa, 1999, 2000)。両種間でみられる模倣能力の差異は、新生児模倣の消失以降、異なるかたちで発達することで生み出される可能性が示された。

4-6 環境教育における霊長類研究の成果利用に向けての基礎的調査

郡司晴元 (茨城大・教育)

霊長類研究所にて、チンパンジー放飼場及びサンルームでのビデオ撮影と文献調査を行い、標記利用の可能性を考察した。以下その一例を述べる。

近年、(財)公園緑地管理財団により Project WILD という野生生物を題材にした環境教育プログラムが邦訳され、普及されている。この中に「移動の障害 (原題は Migration Barriers)」という活動があり、邦訳ではサルを題材にしている。野生動物の移動と高速道路という人間の活動による影響を考えさせる活動である。

活動ガイドだけでも実践は可能だが、移動の様子、移動が制限された事例などが野生ニホンザル研究の成果から加われば、より豊かな活動になるだろう。また、チンパンジーが歩く道と人間が建設しようとする高速道路を比較させたり、野生チンパンジーの移動を可能にしようとする緑の回廊プロジェクトを紹介したりすることも活動の効果を高めるだろう。これらの効果的な具体化には実践的な研究が必要である。

参考文献：プロジェクト・ワイルドー本編ー活動ガイド第3版 (財)公園緑地管理財団，2004

4-7 チンパンジーにおける予期による反応促進の発達

松澤正子 (昭和女子大・人間社会)

ヒトの空間探索においては、すでに注意を向けたことのある位置への定位が抑制される傾向がある。これは情報収集を効率的に行うための機能と考えられ、「復帰抑制」と呼ばれている。本研究では、チンパンジーにおける復帰抑制とその発達的变化を調べるために、幼児2個体および成体4個体を対象に実験を行った。タッチパネル式モニタ画面の右または左に視覚的な先行刺激とターゲット刺激を継時的に呈示し、ター

ゲット刺激に対する接触反応の反応潜時を測定した。先行刺激と違う位置にターゲットが呈示される反対側条件に比べ、同じ位置にターゲットが提示される同側条件の反応潜時が長い場合を復帰抑制とみなした。1セッションを64試行とし、個体によって6~54セッションを行った。成体では2個体において復帰抑制傾向がみられたが、統計学的に有意ではなかった。一方、幼児では1個体 (パル) において強い復帰抑制が観察された。刺激呈示時間差 (SOA) が150msのときのパルの平均反応潜時は反対側条件に比べ同側条件で短かったのに対し、SOAが500msのときには反対側条件に比べて同側条件の反応潜時が有意に長かった。このことから、チンパンジー幼児が復帰抑制機能をもつ可能性が示唆された。ただし、別の幼児では復帰抑制が観察されず、また成体の反応にも個体差がみられたため、今後、実験パラメータの再検討を行った上で確認の作業を続けていきたいと考えている。

4-8 チンパンジー幼児における意図性の認識

小杉大輔 (京大・文)

チンパンジー乳児が対象の動きの意図性をいかに認識するかについて調べるため、以下のような実験を計画した。主要な手続きは、CRTモニタ (21インチ) 上に、2つの円形の対象が、互いに随伴的に (1つの円をもう1つの円が追跡する) あるいは非随伴的に (2つの円は互いに関連のない軌道で動く) 動く映像を呈示し、被験体の映像への注視時間および画面への接触反応を評価するというものである。刺激映像は、Macromedia社のソフトウェアFlash MXを用いて作成した。本実験に先立ち、予備調査として、作成した刺激映像を、実験の仮説を知らない大学生50名に提示し、2種類の映像がどのような映像に見えるかについての自由記述を求めた。その結果、ヒトの大人であれば、これらの事象を随伴的・非随伴的という次元で区別すること、それぞれの事象に意図性に基づく意味を付与することが確かめられた。本年度は、昨年度までにおこなった因果的認識の発達に関する実験の成果や、被験体の運動、認知の発達を踏まえ実験方法の確立をおこなった。この実験を通じ、ヒト以外の霊長類の乳児でも、抽象的な対象の動きに意図性を付与するという心理的因果性の認識が見られるのかを検証する。

4-9 絵画的奥行き知覚に関する比較認知科学的検討

伊村知子 (関西学院大・文)

チンパンジーの成体とニホンザルの乳児を対象に、